

ブラジルからの熱い風

—ブラジルのサトウキビ生産事情（上）—

塩谷 哲夫

※サトウキビ生産の世界での ブラジルの「実力」

世界のサトウキビ生産は、FAOの発表（2004年）によると、世界の合計で栽培面積が20,287千ha、生産量は1,323,952千tである。そのうちブラジルが5,571千ha（27.5%）、410,983千t（31.0%）を占めている。第2位はインドで、4,100千ha（20%）、244,800千t。3位以下はかなり水があいて、中国（1,353千ha、90,635千t）、タイ、パキスタン、メキシコと続く。

収量もこの年のデータでは、1ha当たりブラジルが約74t、インドは60t、以下は推して知るべしで、ブラジルの生産性の高さが抜きん出ている。ブラジルの農業統計を取りまとめている機関のInst. FNPレポート、2006版によると、サトウキビ生産のビッググループ：「サトウキビ生産者協会」では平均収量89tとしてコスト計算を行なっている。ものすごい高収量である（後述）。

ところで、私が子供の頃、戦時中から戦後早くの時期には福島の田舎でもサトウキビが畑にあって、甘いものが無い時代だったので、こっそりいただいてガリガリかじって、「甘い！」なんてよろこんだものだ。しかし、いまどきの日本では、鹿児島、沖縄以外では目にすることも無く、森山良子の「ざわわ、ざわわ…」の歌で知られてい

る「懐かしい」存在になってしまったサトウキビ。それはどんな作物なのだろうか？

ちなみに、日本のサトウキビ生産は、沖縄（栽培面積の60%）・鹿児島（40%）の大事な特産作物で、最も新しい農林水産省公表データの平成17年度（予想）で、収穫面積21,700ha、125万t、ha単収は約58tである。収量はインド並みとなかなか検討しているが、生産量としてはブラジルとは比べようもない。

※サトウキビとはどんな作物か？

イネ科の草本で、トウモロコシというよりも茎の太いススキの親方みみたいな草姿で、5mにも育って、竹のような節があり、ちょうどススキの穂のようは花が付く。ブラジルでは、「カナ・デ・アスーカウ」、普通は「カーナ」と呼んでいる（ように聞こえる。日本人、日系人は、訛って(?)「カンナ」と言っている）。（写真1）

トウモロコシのような一年生ではなく、多年生作物である。ブラジルでは、40cmぐらいの節付き茎を苗として植え付けて、最初は1年半後に刈り取り、その後は1年ごとに、経済的に引き合う年限としての6～7年半で合計5、6回収穫するのが一般的である。

ブラジルサトウキビ生産者協会（ASSOCANA）のデータ（InstitutoFNP, 2006）によると、1haの収穫量は1回目の

124tから始まって、順次103、93、82、72、62tへと遞減していくが、6回の合計収量は536t（各回平均89t）にもなる。

この場合の収入は初回が一番多くて、収量減に伴って次第に減少していくが1haで6回分の収穫の累計約84万円（1R\$：リアル＝55円として換算）となる。そして、1t当たりの生産コストが1,300～1,500円なので、1回CANAを植えて6年半で6回収穫して、1haの利益として約10万円が得られると計算している。これはスタンダードであって、もちろん年によって、取引環境の変化によって、変動がある。日本人のお金の感覚からすれば、なんだそんな程度かと思われるかもしれない。しかし、一般農村労働者の年間の手取り給与が60～80万円ぐらいだということを頭において経営評価をしてみしてほしい。このあたりの大農場は数百から数千ha、日系移住地の農家でも少なくとも30haぐらいの農地があるから、それだけの倍数の金額になる。

ブラジルの主力農産物のコーヒー、ダイズ、トウモロコシなどはすべて国際商品であり、経営収支は、ドル安・リアル高の為替レートや、激しい価格変動の荒波に翻弄される。儲かる年もあるが、穀物のように大赤字が3年もつづいて倒産する農場もある中で、CANAは今のところ最も安定した利益をあげられる作物であろう。

※サトウキビの収穫作業システム

CANAの栽培は、大きな企業（USINA：製糖・アルコール工場）の直営農場や大農場、それに、中小農家の農地を借り上げた借地（経営受託～作業受託など多様）で行



写真1 ススキのような生育初期のサトウキビ(CANA)

なわれている。そして、CANAの収穫作業には大きくは二通りのシステムがある。

企業による作業の場合は、恐竜のような格好の巨大な[専用刈取機→伴奏して走行するトラクター圃場内トレーラ(昇降ダンプ付き)→カナ・チップ積載金網ボックス型の道路運搬トレーラ]のシステムユニットが、何組も揃って、数十～数百haもの広いカナ畑を昼夜を通して稼動する(写真2)。

一方、小さな農業企業の場合は、[手刈り→ウィンドロウに軽く積み並べ→トラクターグリッパンド（長いままの茎を掴んで）→長茎積載型の道路運搬トレーラ]のシステムである。刈取前に、圃場の周辺から一斉に火を放って、邪魔になる枯葉を焼いてしまう（鉋でのカット作業の労働負担を高める。また、アフリカ蜂のような凶暴な昆虫がいる）。短時間で燃え尽きるが、轟々と音をたてて夜空を焦がすカナ焼きの



写真2 サトウキビの収穫作業
上：サトウキビ専用収穫機
中：収穫作業進行中
下：チップしたサトウキビを運ぶ3連結トレーラ

紅蓮の炎は、乾期カナ地帯の風物詩のようになっている。高台から見渡すと360度の地平線のあちこちから火の手が上がるのが見える(写真3)。実は、この方法は環境に悪影響があるというので、地域や条件を定めて、次第に禁止されつつある。しかし、手軽で労働者に「安全」な枯葉の焼却方式はそう簡単にはなくならないのではない

かと思う。

烏天狗のようないでたちで、焼いた後の煤で汚れた畑の中で黒い茎を、鉞を振って真っ黒になって競い合って手刈りする作業(作業量での歩合制賃金)は大変な重労働であると思う。しかし手刈り作業は、CANA地帯の農村労働者にとって、なくてはならない暮らしの糧となってきたのだ。

※UJINAのサトウキビが農地を 囲い込んでしまうかも…

いずれの作業システムを採るにせよ、CANAの終着駅はUSINA(製糖・アルコール加工場)になる。農地の所有者から借り上げた畑で、UJINAが専用機械化システムで直営するか、間に入った農企業が手刈りを入れたシステムでやるか、一般にはどちらかの方式が行なわれている。100ha以上のまとまった土地になるとUSJNA直営、数十ha程度の農地な場合は農企業の請負になるようである。後者の方が借地料がいくらか高いようである。

このような事態が進行すると、土地所有農家は貸地の地代を収入とするだけの「不労所得者」(?)となるわけである。小さな農業生産者が(と言っても数十haの農地も持っている。〈注〉もっと小さい農業だけでは食べていけない零細農家も沢山ある。このことは別の機会に譲る)、トウモロコシや大豆を作って安定収入を得るのは並大抵ではない。変動する気象環境、特にベラニコ(雨期中に20~30日、あるいはもっと長く、雨が降らなくなる一時的な乾燥)にあったら収穫皆無になる。そして、



写真3 サトウキビの葉焼き。紅蓮の炎を上げて燃え上がる。周囲から点火し、短時間で燃え尽きる



写真4 刈り取ったサトウキビ畑と対峙してユーカリの林(畑)が広がっている

国際的な価格変動、高い利息払いなどの激しい荒波の中で苦労して勝負するよりも、CANAに土地を貸した方が所得が安定している——ということになってしまっているようである。

このところ、1haで3万円を超えるレベルのCANA貸地料ほど高く、安定した収入のある作物はないと人々は言う。USINAも心得たもので、借地料を契約時点にまとめて大金で払う場合もあるし、給料のように毎月に分割して払ってくれたりもするそうである。戦いつかれた中小農民の畑は、悲しいかな、こうしてサトウキビ、CANAに蚕食されていっているのが現状である。「USINAによる農地の囲い込み」と言えるかもしれない。同様のことが、製紙会社によるユーカリ栽培についても当てはまりそうである(写真4)。

※自立して戦うたのもしい若者もいる

しかし、中には農家が機械等のシステムをレンタルして自力でやり通すつわものもいる。

私の友人のニッポ・ブラジレイロのエミーリオはそんな青年である。彼の場合、約40haのCANAを作付けし、「1ha当たり75t生産レベル。収穫時期の1t当たりの価格はR\$27。収穫時に、収穫量の70%分の代金を貰う。残りは分割で時価計算でもらう」というUSINAと契約した。そして、収穫時期に、彼は刈取機2台セットのシステムを借りて、自ら機械のオペレーターを務めながら陣頭指揮をとって働いた。その結果、支払いを受けた70%分の金で肥料や機械などのコストの100%を支払って、まだ30%が手許に残ったという。これで彼はひとまず、 $60 \times 40 \times 27 = R\$64,800$ の売上で、70%のコストR\$45,360を清算して、売上の30%に当たるR\$19,400(約105千円相当)の利益を得たわけである。

ところが、おもしろいのはその後からである。収穫量の残り30%の販売金額を1月から4月にかけて分割で貰うことになる。ここからはすべて彼の手取り利益となる。そして、貰うのは「時価」販売金額である。このことが彼に予想外の儲けをあたえ



写真5 サトウキビの再生株

てくれることになる。すなわち、収穫盛期をすぎるとCANAの価格は必ず上昇してくるので、1tがR\$27以上になるわけである。今年、本誌108号に紹介したような事情で、CANA価格は端境期に向けてどんどん上がった。彼からこの話を聞いた3月中頃にはR\$35であるが、4月にはR\$39ぐらいまでになるだろうと彼は予想していた。そうすると、 $60 \times 0.3 \times 40 \times R\$ \bigcirc \bigcirc$ となるから、少なくともR\$25,000以上(130～140万円)が彼の経営努力の結果として入ってくることになる(ただし、税金でずいぶん持っていかれるらしいが)。USINAは相当荒稼ぎしているようだが、彼のようにしっかり働く独立農業経営者に

は、農地を貸して「不労所得」を稼ぐ人以上の、それなりに報われる大きな見返りがあるわけで、少しばかりホットした。ちなみに、彼の経営の主力は亡き父の跡を受け継いだ採卵養鶏である。そうそう、昨年の地元の市長選挙に彼は女性の市長候補とペアで副市長として立候補した。落選したが、将来地域の農業、コミュニティーを担う人物として育ってくれるのではないかと、頼もしく思った。

ところで、収穫後に再生してくるCANA(写真5)の収穫後の管理作業は比較的簡単なようで、刈り後の早い時期に、トラクタがカナの株をまたいで畑に入れるうちの中耕除草、施肥、必要に応じての防除程度ぐらいである。機械刈りの場合は、畑の表面は「堆く高く」というほどの枯葉で覆われていて雑草が顔を出す隙間があるかというほどであり、成長の早い茎葉で畦間はカバーされてしまうから除草はいらない?(地力維持などの土壌管理の作業、システムについては後述)。

(以下次号へ)

(会員 東京農工大学名誉教授、在ブラジル：JATAK農業技術普及交流センター)

(15頁より)

それにしても、赤だろうが黒だろうが、まだ当方から出すうちは結構というものだろう。

◇

政治も少子化・高齢化を心配して、何か手を打とうとしているらしいが、社会保障費を削って、さらには増税、とくに

老人からの税収をふやし、併せて医療費負担の増加という策で国の財政のバランスをとろうというような政治では、心うききすのご祝儀袋を使う機会は、減りこそすれ、ふえることはあるまい。袋の紅・黒の比率が政治の良・否につながっていると思うのは僻みか。

(会員 「農政と共済」コラムニスト)